

ただ、題名が示すように、「用法」が中心問題であり、時制、態、法、その他動詞の問題を相関的に深く掘り下げ明晰に論じてあると言うのはやや言い過ぎかと思われる。著者は Introduction で *Il existe à la vérité une surcatégorie de l'aspect-temps à l'intérieur de laquelle temps et aspect se font équilibre* : quand l'un croît, l'autre doit nécessairement décroître (実際は *aspect* と *temps* の両方を含むいわば上部範疇が存在しており、その中では *aspect* と *temps* がお互に均衡を保ち、一方が増大すれば他方は必然的に減少する) と言っているが (P. 15), その上部範疇 (*surcatégorie*) なるものは、その後直接には扱われておらず、余り明確になってこないように思う。しかしいずれにしても、特に我々外国人には有意義な点が多いので、その方面に関心をおもちの方には一読をお勧めしたい本である。

言語学関係の学術雑誌について

愚 魯 人 録

世界各国で出されている言語学関係の学術雑誌の数はかなりの数に達するが、ここでは広大な言語学教室で現に継続購入しているものを一通り列挙することにする。当初は *Language* と *BSL* の二誌しか入れていなかった—いやその二誌を入れるのがせい一杯だったわが教室も、今は20数誌を購入しつつある。もちろんこれとて、世界中の学術雑誌のほんの一部にすぎないし、その上大部分が64年以降入ったものであるから、真に利用できる段階に達しているとは言えないのであるが、読者の参考までに紹介する次第である。記載は、誌名、発行地名、発行国名、教室に現存する巻数(1964〜とあるは、1964年以降のがあるとの意味)、説記、の順になっている。一応アルファベット順に排列した。

(1) *L'Année philologique, Bibliographie critique et analytique de l'antiquité gréco-latine, Publiée avec le concours de l'U. N. E. S. C. O. et du Centre National de la Recherche Scientifique, Paris* (フランス), tome xxxi (bibliographie —

—graphie de l'année 1960), 1962～。年間に出版された古典関係のあらゆる分野(文学, 語学のほか歴史, 哲学其の他をふくむ)の単行本及び論文を網羅収載し, 2年後に出版するもの。1964年版に記するところでは検討した学術雑誌の数575。

(2) Archiv Orientalni, Praha〔チェコスロヴァキア〕, Vol. 27 (1959), Vol. 33 (1965)～。チェコスロヴァキア科学院の東洋研究所の機関誌。東洋関係のあらゆる分野の論文を載せる。言語関係の面白いものもよく見られる。

(3) 'Aqhna, Athene〔ギリシア〕, vol. 58 (1954)～。アテネ科学院の機関誌。

(4) Bibliographie Linguistique, Utrecht—Anvers〔オランダ, ベルギー〕, l'année 1952 (1954)～。言語学者国際常置委員会の刊行。毎年の言語学関係の著書論文を掲載。1961年の当誌がその資料として用いた各種の刊行物一覧が附載されているが, その総数864である。

(5) Bulletin de la Société de Linguistique de Paris, Paris〔フランス〕, 1954, 1956, 1958～1960, 1962～, 1869年創刊。世界の言語学雑誌中最古の一つ。年2冊刊行のうち, 1冊は論文, もう1冊は書評に当てられている。創刊号より第10巻まで(1869～1899)のバックナンバーを近く購入予定。

(6) Byzantinische Zeitschrift, München〔ドイツ〕, 52 Band～。1892年 Krumbacher によって創刊された。ビザンチンおよび近代ギリシアに関する代表的雑誌。言語以外全般に亘る Bibliographie あり, 至便。

(7) Foundations of Language, International Journal of Language and Philology〔オランダ〕, vol. 1 (1965)～。オランダでは近時言語学関係の図書の刊行が甚だ盛んである。後述の2誌(Lingua, Linguistics)に加えて本年よりこの雑誌が創刊された。Board of Editorsに M. Halle, B. Mates, P. Hartmann, J. F. Staal, K. Kunjunn Raja, P. A. Verburg, J. W. M. Verhaar の名があり, また Board of Consulting Editors としては, Martinet, Pike, Rapoport, Robins, Dixon, Chomsky, Ziff など世界各国の学者35名の名が列ねられており(日本からは服部四郎教授の名が出ている), 文字通り国際的な雑誌である。

(8) Germanisch—Romanische monatschrift, Heidelberg〔ドイツ〕, Neue Folge Bd. XV (1965)～。西欧の言語といえばゲルマン語とロマン語で代

買されるといってよいが、この両言語についての由緒ある学術雑誌。

(9) Glotta, Zeitschrift für griechische und lateinische Sprache, Göttingen [ドイツ], XXXV 111 Bd. (1960) へ。古典語関係の由緒ある雑誌。

(10) Gnomon, München [ドイツ], 1953 へ、古典語関係の最も代表的な書評専門誌。

(11) Indogermanische Forschungen, Zeitschrift für Indogermanistik und allgemeine Sprachwissenschaft, Berlin [ドイツ], 1955 へ、Brugmann と Streitberg の監修によって1900年に創刊された。1964年現在の編集者はH. Krahe とW. P. Schmid である。印欧語関係の着実な論文が多い。

(12) Indo-Iranian Journal, The Hague [オランダ], vol. III -1 (1959) へ、論文、書評のほか詳しい受贈本一覧表があり、インド・イラン学の研究趨勢を知るに便利。

(13) International Journal of American Linguistics, Baltimore [アメリカ], vol. 30 (1964) へ、アメリンディアン言語に主力を注いでいる。

(14) Journal of the American Oriental Society, Baltimore [アメリカ], vol. 82 (1962) へ、言語学関係ばかりではないが、毎巻言語に関するものが載っている。半分は書評で、役に立つ。

(15) Language, Journal of the Linguistic Society of America, Baltimore [アメリカ], 1954 へ、アメリカの最も代表的な言語学雑誌。本年中にバックナンバー (1925 へ1954) が入り、この雑誌は創刊号より全部揃うこととなるはず。

(16) Lingua, International Review of General Linguistics, Amsterdam [オランダ], vol. VIII (1959) へ、本誌の目的は “to present such studies as are of interest to every linguist, whatever his own specialization” とうたっているように、各校の言語、各校の新理論、各校の分野の論文がのせてある。用語は主に英語、それに独、仏語などがまじる。

(17) Linguistics, An International Review, The Hague [オランダ]

， 1 (1963) ～， 不定期刊行， 今日までに 67 まで出ている。主として言語の理論的論文がのっている。

(18) *Phonetica, International Journal of Phonetics*, Basel [スイス], vol. 11 (1964) ～， 文字通り音声学の国際雑誌。

(19) *Revue de Etudes Slaves*, Paris [フランス], tome XXXV (1958) ～ [欠号あり]， パリ大学の l' Institut d' Études Slaves より出ている。A meillet P. Boyer, A. Mazon が fondateurs であって， 最も権威あるスラヴ語学雑誌。書評の量も多く有益。

(20) *Die Sprache, Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, Wien [オーストリア], v. III Bd. (1962) ～， オーストリア言語学会の委託による出版。H. Kronasser が主宰するだけあって， 主に印欧語の， それも古い言語が多く扱われている。

(21) *Studia Linguistica, Revue de linguistique générale et comparée*, Lund [スウェーデン], XVI (1963) ～， 主としてスウェーデンの学者によって出されているところに特徴あり。

(22) *Zeitschrift für Mundartforschung*, Wiesbaden [ドイツ], XXII Jahrg. (1964) ～， 内容の重点がドイツおよびその周辺の方言におかれがちなのはやむをえないことであろう。

(23) *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiet der indogermanischen Sprachen*, Göttingen [ドイツ], 76 Bd. (1960) ～， 1852年 Kuhn によって創刊された， 印欧語比較言語学の最も古い且つ代表的な雑誌。

(24) *Word, Journal of the Linguistic Society of New York* [アメリカ], *Language* と並ぶアメリカの代表的言語学雑誌。この方がより進歩的な感じあり。

このほか， 国内の学術雑誌では

「西洋古典学研究」 1953, 1955, 1957 ～， および

「西洋アジア研究」 63 (1964) ～ などがあつた (なお， 日本言語学会の機関誌「言語研究」も近く購入予定)， そのほか， 他教室と重複などの理由で購読を中止したため， あるいは一時的な受贈などのため， 部分的に入っている内外の諸雑誌が若干あるが， それらはここで省

略する。

なお来年度よりは次の4誌を新たに購入の予定である。

Zeitschrift für Assyriologie und verwandte Gebiete。

Journal of Cuneiform Studies。

Orientalia。

Journal of Linguistics (この最後のものはイギリスで新しく出されることになった言語学の学術誌である。)